

一 次の文章を読んで、後の一から八の各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

店で商品を購入するとき、金銭との交換が行われる。でも、バレンタインデーにチョココレートを贈るときには、その対価が支払われることはない。好きな人に思い切つて、「これ受けとってください」とチョココレートを渡したとき、「え？ いくらだったの？」と財布からお金をとり出されたりしたら、たいへんな屈辱になる。

贈り物をもろう側も、その場では対価を払わずに受けとることが求められる。このチョココレートを「渡す／受けとる」という行為は贈与であつて、売買のような商品交換ではない。だから「経済」とは考えられない。

では、ホワイトデーにクッキーのお返しがあるとき、それは「交換」になるのだろうか。この行為も、ふつうは「贈与への「返礼」として、商品交換から区別される。たとえばほとんど等価のものがやりとりされていても、それは売買とは違う。そう考えられている。

商品交換と贈与を区別しているものはなにか？

フランスの社会学者ピエール・ブルデュは、その区別をつくりだしているのは、モノのやりとりのあいだに差しはさまれた「時間」だと指摘した。

たとえば、チョココレートをもらつて、すぐに相手にクッキーを返したとしたら、これは等価なものを取引する経済的な「交換」となる。ところが、そのチョココレートの代金に相当するクッキーを一カ月後に渡したとしても、それは商品交換ではない。返礼という「贈与」の一部とみなされる。このとき、やりとりされるモノの「等価性」は伏せられ、「交換」らしさが消える。

商品交換と贈与を分けているものは時間だけではない。①お店でチョココレートを購入したあと、そのチョココレートに値札がついていたら、かならずその値札をはずさだろう。さらに、チョココレートの箱にリボンをつけたり、それらしい包装をしたりして、「贈

り物らしさ」を演出するにちがいない。

店の棚にある値札のついたチョココレートは、それが客への「贈り物」でも、店内の「装飾品」でもなく、お金を払つて購入すべき「商品」だと、誰も疑わない。でもだからこそ、その商品を購入して、贈り物として人に渡すときには、その「商品らしさ」をきれいにそぎ落として、「贈り物」に仕立てあげなければならない。

なぜ、そんなことが必要になるのか？

ひとつには、ぼくらが「商品／経済」と「贈り物／非経済」をきちんと区別すべきだという「きまり」にとっても忠実だからだ。この区別をおして、世界のリアリティの一端がかたちづくられているとさえいえる。

そして、それはチョココレートを購入すること、プレゼントとして贈ることが、なんらかの外的な表示(時間差、値札、リボン、包装)でしか区別できないことを示している。

たとえば、②バレンタインの日にコンビニの袋に入った板チョコをレシートとともに渡されたとしたら、それがなにを意図しているのか、戸惑つてしまうだろう。でも同じチョココレートがきれいに包装されてリボンがつけられ、メッセージカードなんかが添えられていたら、たとえ中身が同じ商品でも、まったく意味が変わってしまう。ほんの表面的な「印」の違いが、歴然とした差異を生む。

ぼくらは同じチョココレートが人と人とのあいだでやりとりされることが、どこかで区別しがたい行為だと感じている。だから、わざわざ「商品らしさ」や「贈り物らしさ」を演出しているのだ。

ぼくらは人とのモノのやりとりを、そのつど経済的な行為にしたり、経済とは関係のない行為にしたりしている。「経済化＝商品らしくすること」は、「脱経済化＝贈り物にすること」との対比のなかで実現する。こうやって日々、みんなが一緒になって「経済／非経済」を区別するという「きまり」を維持しているのだ。

でも、いったいなぜそんな「きまり」が必要なのだろうか？

ぼくらはいろんなモノを人とやりとりしている。言葉や表情なども含めると、つねになにかを与え、受けとりながら生きている。そうしたモノのやりとりには、「商品交換」と「贈与」とを区別する「きまり」があると書いた。ひとつ注意すべきなのは、そのモノのやりとりにお金がかかれば、つねに「商品交換」になるわけではない、ということだ。

結婚式のご祝儀や葬儀の香典、お年玉などを想像すれば、わかるだろう。お金でも、特別な演出（祝儀袋／新札／袱紗／署名）を施すことで贈り物に仕立てあげられる。ふつうは結婚式の受付で、財布からお金を出して渡す人なんていない。

なぜ、わざわざそんな「きまり」を守っているのか？ じつは、この「きまり」をとおして、ぼくらは二種類のモノのやりとりの一方には「なにか」を付け加え、他方からは「なにか」を差し引いている。

それは、「思い」あるいは「感情」と言ってもいいかもしれない。

贈り物である結婚のお祝いは、お金を祝儀袋に入れてはじめて、「祝福」という思いを込めることができる。と、みんな信じている。

経済的な「贈与」の場合は、そうした思いや感情はないものとして差し引かれる。マクドナルドの店員の「スマイル」は、決してあなたへの好意ではない。そう、みんなわかっている。

経済と非経済との区別は、こうした思いや感情をモノのやりとりに付加したり、除去したりするための③装置なのだ。

レジでお金を払って商品を受けとる行為には、なんの思いも込められていない。みんながそう考えることで、それとは異なる演出がなされた結婚式でのお金のやりとりが、特定の思いや感情を表現する行為となる。

それは、光を感じるために闇が必要のように、どちらが欠けてもいけない。経済の「交換」という脱感情化された領域があつてはじめて、「贈与」に込められた感情を際立たせることができる。

この区別は、人と人との関係を意味づける役割を果たしている。

たとえば、「家族」という領域は、まさに「非経済／贈与」の関係として維持されている。家族のあいだのモノのやりとりは、

店員と客との経済的な「交換」とはまったく異なる。誰もがそう信じている。

レジでお金を払ったあと、店員から商品を受けとって、泣いて喜ぶ人などいない。でも日ごろの感謝の気持ちを込めて、夫や子どもから不意にプレゼントを渡された女性が感激の涙を流すことは、なんもおかしくない。

このとき女性の家事や育児を経済的な「労働」とみなすことも、贈られたプレゼントをその労働への「対価」とみなすことも避けられる。そうみなすと、レジでのモノのやりとりと変わらなくなってしまう。

母親が子どもに料理をつくったり、子どもが母の日に花を贈ったりする行為は、子どもへの愛情や親への感謝といった思いにあふれた営みとされる。母親の料理に子どもがお金を払うことなど、ふつうはありえない。そんな家庭は、それだけで「愛がない」と非難されてしまう。

子育てとは無償の愛情であり、家族からのプレゼントも日ごろの労働への報酬ではなく、心からの愛情や感謝の印である。それは店でモノを買うような行為とはまったく違う。ぼくらはそのようにしか考えることができない。たとえそのモノが数時間前まで商品棚に並んでいたとしても。

家族のあいだのモノのやりとりが徹底的に「④」されることで、愛情によって結ばれた関係が強調され、それが「家族」という現実をつくりだしている（なぜ「母親」が「④」された領域におかれるのかも、ひとつの問いだ）。

家族という間柄であれば、誰もが最初から愛にあふれているわけではない。⑤それは脱感情化された「経済Ⅱ交換」との対比において（なんとか）実現している。

「家族」にせよ、「恋人」にせよ、「友人」にせよ、人と人との関係の距離や質は、モノのやりとりをめぐる経済と非経済という区別をひとつの手がかりとして、みんなできくりだしているのだ。

〔注〕 * 袱紗Ⅱ贈り物を包む儀礼用の布。

（『うしろめたさの人類学』 松村 圭一郎）

問一 ―線ア―オの「贈与」のうち、本来は別の言葉が充てられており、このままでは意味の通らない箇所が一箇所あります。その箇所を一つ選び、ア―オの記号で答えなさい。

問二

A

E

 のうち、次の一文を入れるべき箇所として最も適当なものを一つ選び、A―Eの記号で答えなさい。

だからバレンタインのチョコで思いを伝えるためには、「商品」とは異なる「贈り物」にすることが不可欠なのだ。

問三 ―線①「お店でチョコレートをし値札をはずすだろう」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適当なものを次のア―オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 値札があると相手への思いが額面で数値化されかねないから。

イ 手作りでないことが値札があるとばれてしまうから。

ウ 値札を外し贈り物として意味づける慣習があるから。

エ お金をどれくらいかけたかが値札で周りに伝わってしまうから。

オ 値札を外さないと相手に思いやりがないと思われるってしまうから。

問四 ―線②「バレンタインの日に戸惑ってしまうだろう」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適当なものを次のア―オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 特別な思いを伝える場で交換の論理が顔を出し、贈り物の意図が宙づりにされてしまうから。

イ それらしい包装をしないことによって、かえって相手に敵意や嫌悪感を抱かせてしまうから。

ウ チョコレートに特定の感情は存在せず、贈ることが自他の感情をつなぐ架け橋とはなり得ないから。

エ いかにもバレンタインらしい包装をしてしまうと、相手に気恥ずかしさを与えてしまうから。

オ 行事の意味は社会的に認知されているのに、その意味を示す「印」が包装には存在しないから。

問五 ―線③「装置」のここでの意味として最も適当なものを次のア―オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 感情があるか否かを見極めるために社会的に整えられた、経済的な「交換」を示すための手続き。

イ 贈り物にこめられた感情を際立たせるために作られた、贈与か否かを区別するという仕組み。

ウ 家事や育児を労働とみなさないために作られた、愛情で結ばれた「家族」という枠組み。

エ 交換か否かを見極めるために社会的に意味づけられた、値札を取り、リボン・包装を施す手続き。

オ 贈り物を単なる商品のやりとりとみなさないために存在する、脱感情化された「交換」の仕組み。

問六 二つある

④

 には同じ言葉が入ります。最も適当な言葉を本文中から四文字で抜き出しなさい。

問七 一線⑤「それは」（なんとか）実現している」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 近年ではお金を払って家事を代行してもらう動きもあり、家事や育児を無償の愛情として女性に押しつける考え方は世間からの風当たりが強く、これ以上その考え方をを用いることはできないから。

イ 対人関係のあり方は交換されるモノや当事者にそなわる何かによりあらかじめ決まるわけではなく、区別を行う人々の具体的な営みを通してそのつど作られるものにすぎないから。

ウ 人と人との関係の距離や質は贈り物の交換を通して維持されるものであり、思いやりや愛情といった心の働きは贈り物の交換によって事後的に作られるものにすぎないから。

エ 女性の家事や育児を経済的な労働とみなすことを避けようとする背後には、女性のそうした仕事の実質的に労働であり、その対価として金銭が発生するという議論を導いてしまうから。

オ 商品と贈り物の区別は時間差や贈り物になされる包装などの何らかの外的な表示によつてはじめて区別できるようになり、その区別を適切に行うことで人付き合いを円滑にすることができから。

問八 商品交換と贈与の区別があることで、どのようなことが可能になっていると筆者は考えていますか。四十字以内で答えなさい。

二

次の文章を読んで、後の一から八の各問いに答えなさい。

（ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。）

おつ、ゆうちゃんだ。俺は上の踊り場から下の踊り場へつばを飛ばす。

つばは、ゆうちゃんの右足前方10センチついでいうところに落下して、俺は「ああやつぱオレって天才的」ってころのなかで喝采を叫ぶけど、ゆうちゃんはそれを完全無視してじぶんの家の玄関に消えた。気がつかなかったってこと？

そんなはずはない。ゆうちゃんのこれから出そうっていう左足が、一瞬、わずかにためらったのを、俺は見逃さなかったからね。どうかしたのか、あいつ。そう言えば、顔色悪かったかも。俺はちよつとマジで心配になって、だけど、ほんとうを言えばあいつの顔色なんて見えなかったしなつて思い直す。

俺が見たのは、染めてない黒い髪と鼻のてっぺん、それから黄色いパーカーの肩のあたり、ジーンズとスニーカーのその双方の先っぽ。なんとも鋭い観察眼。これじゃあまるで、好きな女の子のことを一心に見つめてみたいじゃないか。冗談じゃないな。でも、ちらつと見えたあいつの鼻の頭、赤くなかったか？

あのさあ、断つておくけど、ゆうちゃんはおばさんだ。おばさんって言っても俺のおばさんじゃなくて、不特定多数のおばさん、そこらへんのおばさん、もすこし詳しく言うと、俺のマンションの隣の隣の部屋に住んでいる独身のおばさんだ。

だからほんとうに、欲望の対象でも愛情の対象でもないのよ。

（中略）

なんだか腹が減ってきた。①おふくろ、晩飯、作つてあるのかな？ そう言えば、さつきお湯、沸かしたとき、レンジの上に鍋、載つてなかったよな。ていうことは、また弁当か。ほっかほか亭。

金。金。おい、おふくろ、おまえ、金、置いておくのも忘れたんじゃないの？ いつもの場所に晩飯代が置いてなくて、ほら、

こういうことがあるから金、まとめて渡してくれて言ってるのに。まったく、ついてねえ。俺、どうすんのよ。

文句を言うついでに、飯、マジどうするのか、おふくろに電話しようとしたとき、ドア・チャイムが鳴った。だれだよ。

「はい」

「なんて不機嫌そうな声。いい声が台無しだよ」

インターフォン越しにゆうちゃんが言った。さっきのつばのこと、今ごろになって言いに来たのかよ。るせえ、おせっかいばあ。

「なんすか？」

「なんですかって言ったのよね、たぶん。あのさあ、いっしょにおでん、食べない？」

「はあ？」

「おでんよ、おでん。とにかく開けて」

おかあさんから、申し訳ないけどお金、立て替えといてって電話があつてね、いいよって答えて電話を切つて、お財布持つて玄関を出ようとしたとき、そうだ、ゆうべ作ったおでんがいつぱいあるじゃない、それ、いっしょに食べよう、片付くしって思いついたのよ。悪いけど、おいしいわよ。そう言いながら、ゆうちゃんは上がってきた。俺んちに。

べつに悪くないけど、こういうの——湯気のある土鍋を持ってゆうちゃんはドアの前に立っていた——はさすがにはじめてで、②それって、おまえの鼻の頭が赤かったこととなんか関係があるわけ？　って、俺は思ったけど、もちろん聞かない。

それで俺たちは向かいあつて、おでんを食べた。ゆうちゃんは土鍋のほかにタッパーに炊きたてのごはんを詰めて持ってきて、俺のお客さん用のご飯茶碗にそれもよそった。だけど、どうしてこの季節におでんなんだ？

おでんはたしかに結構うまくて、腹も空いていたし、俺はすごい勢いで食べ続けていたけど、ゆうちゃんはあるまい食べない。食わないのって聞いたたら、なんだか疲れちゃってって言う。

ああ疲れた、女がひとりで生きていくのは大変なのよ。って言うのがおふくろの口癖だ。ひとりじゃないじゃん、俺がいるじゃん。そうだった、だから余計疲れるんだ。つぎからつぎに問題起こしてくれる息子がいるから。③ああわかつてるよ。ほんのこの言えば、悪いと思ってる。言ったことないけど。あんたは我慢が足りなくて、我慢が足りないばかりにちよつとところで周りが誤解される。あんたはほんととすぐやさしい気のいいやつだよ、それはママ、よくわかつてる。だからもすこし我慢すればいいものを、しきれずに切れちゃって、それで最後にはあんたが悪くなっちゃうのよ。途中までは相手のほうが悪かったとしてもね。そのために、どれだけ下げなくていい頭を下げ続けてきたことか。まあ、そんなふうにおふくろが言うときは、平和なときだな、俺もおふくろもおたがい。

俺がいなかったら、おふくろは、その分、楽になったろうか？　デザイナーでもともと稼ぎのよかったおふくろが、ほとんど稼ぎのなかった俺のオヤジをたたき出すように離婚して、それで俺がいなかったら、すげえ助かったのか。そうかもしれない。

俺なんて、産まなきゃな。かあさんさあ、俺を産んだこと、後悔してるんだろ？　ばかじゃないの、そんなことあるわけないでしょ。じゃあ産んでよかったわけ？　あたりまえでしょう。そうおふくろは言う。それがほんのときもあるけど、嘘のときもあるのを俺は知っている。嘘つくんじゃねえよ、このくそばあつて思うけど、ほんと、産まなきゃよかったわ、なんて死んでも聞きたかない。④なんでって、なんでもだ。

「なんで？」

って、俺は聞いた。

「えっ」

「だから、なんで疲れてるの？」

言いかたがやさしくて、俺はあせった。なに、やさしく話しかけてんだ、もっと不機嫌にしゃべろよ。と、俺は俺に言う。でも、ゆうちゃんは気がつかなかったみたい。

「まあ、いろいろあるのよ」

って、言った。

やっぱ、変だ。つばにも、俺の言いかたにも気づかないなんて。それって、鼻の頭が赤かったことと関係があるのか？

「仕事とか？」

「仕事もそうだけど、人間関係かな。しょうがないんだけどね。でも、ああまで通じないと、ほんと情けなくなる」

ゆうちゃんの鼻の頭が見るまに赤くなっていく。やっぱなんかあったんだ。だけどこんなとこで泣くなよな。俺、知らねえぞ。だから泣くなって言ってんじゃねえかよ。おまえが泣くのが、俺はいちばん嫌なんだよ。ママだって、泣きたくなるときがあるわよ。やつてもやつても仕事が終わらなくて、だけど、あんたを育ててかききいけなくて、必死で働いてるの。へとへとよ、へとへと。そこへ持ってきて、あんたがまた学校で問題を起こす。もういい加減にしてよ。なんでもかんでも俺のせいだよ、我慢が足りねえって言うのかよ。そう、我慢が足りないわね、はつきり言って。なんど約束したのよ、もう切れないうって。わかったよ、俺がいなきやいいんだろ。出てってやるよ、こんな家。出てくって、こんな夜遅くにどこへ行くのよ。その辺、ふらふらするの、やめなさいよ。マンションでなんて言われてるか知ってるの？ もうこれ以上、問題、起こさないでよ、ここにもいられなくなる。るせえんだよ。俺は拳固で壁をたたいた。はげしく一度。もうやめてよ。そう言って、おふくろはまた泣きはじめた。からだをまるめて。まるまってちいさくなったおふくろのからだ。

泣いているおふくろをそのままにして、俺は部屋にこもる。確におまえは働いてるよ、親父がいたところからずっと。そう、俺の記憶にある限りずっとずっと働いてたよ。だから俺は我慢してんだよ。ほんととあんたにそばにいて欲しくてしかなかった。だけど我慢してたよ。いまだって、我慢してるよ。なのにまだ我慢しろって言うんだ？ このまえおまえ、俺と晩メシ食ったの、いつだと思ってるの？

「泣きたきや、泣けばいいじゃん」

俺がそう言うのと、ゆうちゃんはえって言う顔をして俺を見た。俺もそんなこと言うつもりは全然なくて、おい、俺、どうしちやったのよって、思ったくらい。でも、俺の言葉はおかまいなしに俺の口から飛び出していく。

「我慢しないでいいじゃん。うわっと泣いて、また元通りになればいいじゃん。おふくろなんて、しょっちゅう泣いてる」

⑤それは、きみが泣かせるからでしょう？ おまけにおばちゃんまで泣かせちゃって。悪いけど、ティッシュ、くれる？」

俺が渡したティッシュでゆうちゃんは目元をおさえ、おんなじそれで鼻をかんだ。

「きたねえ。だいいちカッコわりい」

って、俺は言った。

「きたなくてカッコ悪くて悪かったわね」

と、ゆうちゃんは言った。いつもの威勢のいいおばさんに戻りつつある。案外、回復が早いな。

「だけど、ひとりで戦って生きてきたんでしょ？」

「えっ」

「いつか、そう言ってたじゃん。俺とおふくろが、ゆうちゃんの前でやりあってさあ、ゆうちゃんがなんか偉そうなこと言って仲裁にはいつて、うるせえ、ばばあ、おまえなんかににがわかる……」

「ああ、言った言った。わかるよ、あたしだって、子供のときからひとりで戦って生きてきたんだからって」

「そうそう。あんときは、なにくせえこと言ってんだ、このばばあって思ったけど」

「思ったけど？」

「その戦闘的な性格からして、そうかなって思わないでもない」

俺がそう言うのと、ゆうちゃんは口を大きくあけて笑った。

「戦闘的なところは、あたしたち、いっしょかも」

「けっ」

「けってなによ？ いやなわけ？」

「べつにいやなわけじゃないよ」

ふふって、ゆうちゃんが笑う。なんか気持ちわりい。

「なんだかきみに、⑥連帯のメールを送りたくなつたな」

「なんだよ、連帯のメールって？ メールなんていらねえよ」

ほんと、マジでいらねえ。欲望の対象でも愛情の対象でもないからな。隣の隣に住んでるばああのみまでいいよ。

「バカだねえ、メールじゃなくて、メール。でも、メール送るのも、悪くないか？」

「いや、いいす」

と、俺は答えた。

ほんと、いいす。ちょっとやさしくしたからって、メールじゃなくて、メールなんてくれなくて、いいす。そういうの、面倒だし、面倒な女は、いまんとこ、おふくろだけで充分なんだよ。

(『連帯のメールをおくる』 石井 睦美)

〔注〕 * ほつかほか亭^{てい}正しくは「ほつかほか亭^{てい}」。持ち帰り弁当のチェーン店。

問一 ―線①「おふくろ、ゝまた弁当か。ほつかほか亭^{てい}」とありますが、ここから「おふくろ」のどのような状況^{じきやう}がうかがえますか。

か。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 文句を言う息子と一緒にいるのが苦痛で、食事を一緒にしようとしていない。

イ お金を渡しておけばどうにでもなると考え、息子の気持ちを考えていない。

ウ 仕事で少しでも早く実績を上げようと焦り、食事をおろそかにしている。

エ 一人で子供を育てるために必死になって働き、家を空けがちにしている。

オ 息子なら自分の苦勞を理解してくれるにちがいないと勘違いしている。

問二 ―線②「それ」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ゆうちゃんがゆうべ作ってあったおでんを持って「俺」といっしょに食べようとやって来たこと。

イ ゆうちゃんが「俺」の母親の依頼を快く引き受けて夕食代を立て替えてあげようとしたこと。

ウ ゆうちゃんが食事の世話をしようと相手の了解も得ずに勝手に「俺」の家に上がり込んで来たこと。

エ ゆうちゃんが人恋しさから生意気な「俺」にもちよつと世話をしあがえようと思いついたこと。

オ ゆうちゃんが「俺」の母親からの頼みだといって湯気のある土鍋を持って来てくれたこと。

問三 ―線③「ああわかってるよ」とありますが、どういうことが「わかってる」のですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「俺」が何度も問題を引き起こし、そのたびに母親が本当は下げなくてもいい頭を下げ「俺」をかばい続けてきてくれたということ。

イ 母親が女手一つで苦勞して「俺」を育ててくれているのに、男の自分が今まで何の手助けもしてあげられていないということ。

ウ 「俺」は我慢が足りないばかりに度々周囲の誤解を招いてきたので、いかげん辛抱強さを身につけなければならないということ。

エ 母親がしなくてもいい大変な苦勞をしているのは、もとはと言えば「俺」に原因があり、謝ってすむようなものではないということ。

オ ただでさえ仕事が多忙で大変なのに「俺」が次から次へと問題を引き起こすものだから母親を余計に苦しめてしまっているということ。

問四 ―線④「なんでって、なんでもだ」とありますが、ここには「俺」のどのような本音が隠されていると考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母親にまで自分の存在を否定されたらもう生きていけないのではないかと絶望に似た思い。

イ 自分が問題児だということは充分わかっているが、せめて母親だけには許してもらいたいという思い。

ウ 母親にさんざん迷惑をかけ困らせていると思うものの、心の底では強く母を恋慕うという思い。

エ 周囲の人たちにどう思われようと、自分の存在には意味があるにちがいないという強い自負の思い。

オ すべて「俺」が悪いように見られるが、母親にも責任があるということを理解してほしいという思い。

問五 意に沿わない息子を前にして悲しみに打ちひしがれている母親の様子を、感情を示す言葉を一切用いず端的に表現した二十字程度の一文を本文中から探し、その最初の五字を抜き出ささい。

問六 ―線⑤「それは、きみが泣かせるからでしょう？ おまけにおばちゃんまで泣かせちゃって」とありますが、ここには二つの「泣かせる」動作があります。それらの意味の違いを八十字以内で説明しなさい。解答に際しては、「泣かせる」対象の状況・背景を明確にすること。

問七 ―線⑥「連帯のエールを送りたくなかったな」とはどういうことですか。ゆうちゃん的心情として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分につばをかけようとするなど恐れ知らずな「俺」に対してゆうちゃんは昔の自分を見ているようで、将来に期待しなくなったということ。

イ 子供のときから一人で戦って生きてきたという点でゆうちゃんは「俺」と感情を共有でき、「俺」を励ましたくなったということ。

ウ ゆうちゃんも「俺」もきわめて戦闘的な性格であり、周囲とぶつかることも多々あるが、それだけに「俺」を応援したくなったということ。

エ 「俺」が孤独に耐えて一人でがんばって生きている姿にゆうちゃんは共感を覚え、なんとか「俺」と母親の仲が良くなればと願いたくなったということ。

オ 「俺」がゆうちゃんに嫌がらせをしたのは実は寂しさの裏返しだとわかり、自分なりに「俺」を支えてやりたくなったということ。

問八 本文の解釈として明らかに間違っているものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 本文の最後の方で「連帯のエール」という言葉を用いることで、ゆうちゃんと「俺」が心を通わせる様子を読者に感じさせている。
- イ 周囲から問題児扱いされているという自己の現状を半ば投げやりに語る姿勢を通して、思春期の自己を見つめる人物像を印象的に描いている。
- ウ 意図せずにゆうちゃんに優しさを示してしまうという描き方で、粗暴さとは異なる「俺」の人物の一面をさりげなく描いている。
- エ 母と息子の会話がカギかっことで示されないことで、ゆうちゃんの発言をきっかけに読者をなだらかに母と息子の人間関係の描写に誘うことに成功している。
- オ メールを送るというゆうちゃんの申し出を拒否する場面を最後に置くことで、結局この作品のテーマは親子の和解であると暗に読者に示している。

三

次の一線のカタカナを漢字に直しなさい。

- A ニンイで事情の聞き取り調査を行う。
- B 卒業文集の制作にヨネンがない。
- C 弱い者ほどトトウを組みたがる。

豊島岡女子学園中学校入学試験

国語解答用紙（一回）

※のらんには記入しないこと

受験番号					
1	1				

氏名

得点	※
----	---

問一
問二
問三
問四

問五

問六

問七

[illegible]

問一
問二
問三
問四
問五

✖

✖

[illegible]

問七

問八

A
B
C

✖

✖

✖